



Title	太宰治『女の決闘』考：語り手「私(DAZAI)」をめぐって
Author(s)	岩城，佐和
Citation	阪大近代文学研究. 2010, 8, p. 58-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92668
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

太宰治『女の決闘』考

—語り手「私 (DAZAI)」をめぐって—

岩城 佐和

はじめに

太宰治の『女の決闘』は、昭和十五年の一月から六月にかけて「月刊文章」の創作欄に連載された。この作品はヘルベルト・オイレンベルグ原作、森鷗外訳の「女の決闘」に「補筆」したものであるが、「補筆」した結果だけを示すのではなく、鷗外訳の全文を引用、それに手を加えていく過程をも提示している。

これは一人の男をめぐって、その女房と愛人（女学生。以後、女学生と記す）が決闘をするという題材を扱った作品である。決闘の結果、女学生が死に女房が勝つが、その女房も遺書を残して自殺してしまう。鷗外訳は女房の言動を軸に行っており、女学生の描写はほとんどない。亭主に至っては全く登場しないのである。これに対し太宰作では、女学生の内面の動きを書き加え、原作者のヘルベルト・オイレンベルグを亭主として登場させている。

このように鷗外訳に「補筆」するにあたって、意気込みや手順を述べ、小説を進行させるのが「私 (DAZAI)」と称する語り手である。この語り手は読者に親しげに話しかけ、寄り添っているようであるが、「一回十五枚づつで、六回だけ、私がやってみることにします」などという、まるでカルチャーセンターで講義をしているかのような語り口、また「これは非常に、こんぐらかつた小説であります。私が、わざとそのやうに努めたのであります。その為にいるいろ、仕掛もして置いたつもりでありますから、ひまな読者は、ゆつくりお調べを願ひます」といった、読者を挑発するような発言など、その言説にはいかかわしい点が多い。本稿では、「私 (DAZAI)」のいかかわしさを具体的に考察した上で、なぜこのような語り手が登場するのか、「私 (DAZAI)」とはどのような存在なのかという点を中心に考える。

『女の決闘』には、執筆当時の太宰の芸術家としての意識の反映を指摘する論¹⁾や、ヘルベルト・オイレンベルグに

よる原作と鷗外訳、鷗外訳と太宰作の比較を行ない、その変容を考察する論^②など多様な先行論があるが、「私 (DAZAI)」を中心に論じたものは少ない。そのような中、斎藤理生氏は、『女の決闘』を考えるにあたって「先行研究で指摘されてきた芸術家観の問題や実験小説的手法と共に、そうした〈深刻〉さとは異なる滑稽さや疑わしさにも注目する必要がある」とし、「私 (DAZAI)」の語りの「偏り」を指摘する^③。本稿は「私 (DAZAI)」の語りを「性急かつ強引なもの」とする氏の意見に賛成した上で、この語り手のいかがわしさの内実をより具体的に、より本文に即した形で考察するところから始めたい。

一 「私 (DAZAI)」のいかがわしさ

一・一 鷗外訳「女の決闘」に対する周到な仕立て

「私 (DAZAI)」は「第一」で、「鷗外全集」「翻訳篇、第十六巻」から八つの短篇の冒頭部分を引用し、「どうです。うまいものでせう。あとが読みたくなるでせう。物語を創るなら、せめて、これくらゐの書き出しから説き起してみたいものですね」などと讃える。一方で鷗外訳「女の決闘」の冒頭部については、「第二」において次のように批判している。いはば、ぶんなぐる口調で書いてあります。ふところ手をして、おめえに知らせてあげようか、とでもいふやう

なたいへん思ひあがつた書き出しでありました。だいいち、この事件の起つたとき、すなはち年号、(外国の作家はどんなささやかな事件を叙述するにあたつても必ず年号をいれる傾向があるやうに思はれます。)^④それから、場所、それについても何も語つてゐなかつたではありませんか。「ロシアの医科大学の女学生が、或晩の事、何の学科やらの、^⑤といふやうな頗る不親切な記述があつたばかりで、他はどの頁をひつくり返してみても、地理的なことはなんにも書かれてありません。実にぶつきらばうな態度であります。

しかし、「古来例の無い、非常な、この出来事には、左の通りの短い行掛りがある」という鷗外訳「女の決闘」の書き出しの一行は、「第一」であげられている八篇の書き出しと比べてもそれほど異質な印象は受けない。むしろ読者の興味を惹き付け、この一行の後に続く内容に期待を抱かせるような書き出しだと言える。

また、作品内における年号や場所の記述について言えば、「私 (DAZAI)」が「第一」であげた八篇の中にも、本文中にそうした記述がないものは幾つかある。例えば「労働」では年号についての記述はなく、場所についてはカスプルという登場人物が毎晩仕事へ向かう場所が「インスブルツクの方角」だということしか書かれていない。また「一人者の死」では年号、場所ともに記述されていないだけでなく、主要な

登場人物の名前すら書かれていない。彼らはそれぞれ「医師」「商人」「詩人」と職業名で記されているのである。「父」「いつの日か君帰ります」にも、年号や場所に関する記述は見られない。しかし「私 (DAZAI)」は、そうした疑問点を封じ込めるかのような断定的な口調で鷗外訳「女の決闘」を批判し、他の作品と差異化しようとするのである。

更に「私 (DAZAI)」は、「第二」において鷗外訳「女の決闘」の描写の「的確」や「冷淡さ」をあげ、その特異性を繰り返して述べる。

どうしても、この原作者が、目前に遂行されつつある怪事実を、新聞記者みたいな冷い心でそのまま書き写してゐるとしか思はれなくなつて来るのであります。(中略) どうです。少しでも小説を読み馴れてゐる人ならば、すでに、ここまで読んだだけでこの小説の描写の、どこかしら異様なものに、気づいたことと思ひます。一口で言へば、「冷淡さ」であります。失敬なくらゐの、「そつけなさ」であります。

鷗外訳「女の決闘」は、登場人物同士の会話の少ない小説である。作品中、女房と女学生が言葉を交わすのはごくわずかで、決闘の場面における「お互に六発づつ打つ事にしませうね。あなたがお先へお打ちなさい」「ようございます」というやりとりのみだ。また、女学生に宛てた女房の手紙の内容は作品の冒頭で提示されているが、それを読んだ際の女学

生の反応は全く描かれていない。作品の末尾の牧師に宛てて書きかけられた手紙についても、同様である。こうした点から考えても、鷗外訳は女房一人の言動、彼女の引き起こした「古来例の無い、非常な」出来事を描くことに焦点を絞った作品であると言える。「目前に遂行されつつある怪事実を、新聞記者みたいな冷い心でそのまま書き写してゐる」「失敬なくらゐの、「そつけなさ」などといった「私 (DAZAI)」の批判は、鷗外訳「女の決闘」におけるこうした特徴を指していると考えられる。

また鷗外訳は登場人物同士の会話がほとんどないが、そのことによつて作品の冒頭と末尾の女房の手紙が読む者により強い印象を与えていると言えるだろう。「立ちのぼる女の「なま」な憎悪感」「生ぐさい迫力」という「私 (DAZAI)」の発言はこうした点を踏まえたものだと考えられる。

しかし先に触れたような、他作品との強引な差異化を考えると、「私 (DAZAI)」のこうした批判をそのまま受け取ることは危険であると言わざるを得ない。「私 (DAZAI)」は「どうしても、この原作者が、目前に遂行されつつある怪事実を、新聞記者みたいな冷い心でそのまま書き写してゐるとしか思はれなくなつて来るのであります」と断定し、「その、生きてびくびく動いてゐるほどの生臭い、抜きさしならぬ描写に接し、大いに驚くと共に、なんだか我慢できぬ不愉快さを覚えた」と強い口調で作品の描写に対する嫌悪感を露わに

するが、そもそも読者が「私 (DAZAI)」のこうした注釈を抜きにして鷗外訳「女の決闘」を読んだ場合、「異様なもの」や「失敬なくらゐの」「そつけなさ」「我慢できぬ不愉快さ」などを感じるかどうかは疑わしう。

しかし、「私 (DAZAI)」は「存じませう。」「もう、いちど読みかへして下さい」などと親しげに読者に語りかけながら、鷗外訳「女の決闘」の異様さや不愉快さをしきりに述べ立てる。また傍線部のように、まるで挑発するかのような口振りで、読者を次第に自分の解釈へと導いていくのである。「私 (DAZAI)」は明確な根拠も持たぬまま、鷗外訳「女の決闘」を特異な小説として他から際立たせ、異様な冷淡さとの確さを持った不愉快な小説として強引に仕立て上げているのではないか。

この後で「私 (DAZAI)」は鷗外訳「女の決闘」の異様な冷淡さや的確さの説明として、「この小品の原作者 HERBERT EULENBERG さん御自身こそ、作中の女房コンスタンチエさんの御亭主であつた」と「嘘の仮説」を立てる。その直後に「もとよりこれは嘘であります。ヘルベルト・オイレンベルグさんは、そんな愚かしい家庭のトラブルなど惹き起したお方では無いのであります」と、この仮説が嘘であることをくどいほど確認するのであるが、この仮説の土台となっている鷗外訳に対する解釈が既かなり一方的で疑わしいものであることを確認しておきたい。「私 (DAZAI)」は、「第一」

「第二」で鷗外訳を他とは違う異様な作品として仕立てることで、「第三」以降、独自の「女の決闘」を展開するにあつての足場を周到に固めていると言える。

一・二 「私 (DAZAI)」の復讐

「私 (DAZAI)」は「嘘の仮説」に基づいて鷗外訳に「補筆」するのであるが、それに際し「第二」において次のように述べている。

私は、その亭主を、(乱暴な企てであります) 仮にこの小品の作者御自身と無理矢理きめてしまつて、いはば女房コンスタンチエの私は唯一の味方になり、原作者が女房コンスタンチエを、このやうに無残に冷たく描写してゐる、その復讐として、若輩から及ばぬながら、次回より能ふ限り意地わるい描写を、やつてみるつもりなのであります。

ここから分かるように、この後で鷗外訳に付け加えられる描写は、女房の味方となつた「私 (DAZAI)」による、亭主、つまり原作者への「復讐」のためのものである。このことを把握した上で、「私 (DAZAI)」の「復讐」がどのようなものだったのか、果たして「復讐」は成し遂げられたのかという点について考えたい。

「私 (DAZAI)」は「第二」で「復讐」を宣言したのち「第三」において、鷗外訳ではほとんど描かれていなかった女学生を描く。以下に引用するのは「第三」の冒頭部である。

女学生は「こと言つてみたかつた」。「私はあの人を愛してゐない。あなたはほんとに愛してゐるの。」それだけ言つてみたかつた。腹がたつてたまらなかつた。ゆうべ学校から疲れて帰り、さあ、けさ冷やしておいたミルクでも飲みませう、と汗ばんだ上衣を脱いで卓のうへに置いた、そのとき、あの無智な馬鹿らしい手紙が、その卓のうへに白くひつそり載つてゐるのを見つけたのだ。私の室に無断で入つて来たのに違ひない。ああ、この奥さんは狂つてゐる。手紙を読み終へて、私はあまりの馬鹿らしさに笑ひ出した。

「第三」は波線部のように、鷗外訳「女の決闘」の中の一文であるかのような第三者による語りで始まる。しかしその後は傍線部のように、女学生による一人称の語りとなるのである。³⁾「第三」では、女学生による独白、あるいは愛人である亭主との会話という形で女学生の内面の動きが詳しく描かれている。

亭主に対する女学生の言葉に着目したい。女学生は、女房が愛人に決闘を申し込んだことを知つてうろたえる亭主に対

し、「生れてはじめての恋人だの、唯一の宝だの、それは一体なんのことです。所詮は、あなた芸術家としてのひとり合点、ひとりではくほく享樂してゐるだけのことではないの。氣障だねえ」「私は今こそ芸術家といふものを知りました。芸術家といふものは弱い、てんでなつちやゐない大きな低能児ね」「あなたは頼りにならないお人だ。いまそれがわかつた。驚いて度を失ひ、ただらうろろして見せるだけで、それが芸術家の純粋な、所以なのですか。おそれいました」などと手厳しく批判しており、その際に芸術家という彼の職業を持ち出している。この直前の亭主の発言には「私には皆わかるのだ」「私のうつろな絶望の胸」「いのちの最後の詩」「おれの生れてはじめての恋人」など大袈裟で感傷的ともとれる言葉が多用されており、自分で話しながらそれに酔つていようなどころが感じられる。女学生はそうした部分を亭主の言葉から感じ取つたために、殊更に「芸術家」という言葉を持ち出して彼を批判したとも考えられるが、その内容は亭主の頼りなさや意気地のなさへの批判と、芸術家という職業に対する批判が入り混じつており、彼女が自覚しているようにあまり筋が通つているとは言えない。しかし自分で筋の通らない「罵言」だと思いつつも、それをぶつけてしまわなければ済まない女学生の思いが、亭主に向けた痛烈な批判の言葉の中によく表われていると言える。

この後、亭主を家から追い出して一人になった女学生は、

女房と決闘することを決める。以下は決闘の申し込みを受けることに決めた女学生が、散歩に出た公園で亭主と再会する場面である。

「あした決闘を見において。私が奥さんを殺してあげる。いやなら、あなたのお家にじつとひそんで、奥さんのお帰りを待つてみなさい。見に来なければ、奥さんを無事に帰してあげるわよ。」さう言つたとき、あの人はなんと答へたか。世にもいやしい笑ひを満面に湛へ、ふいとその笑ひをひつこめ、しらじらしい顔して、「え、なんだつて？ わけの分らんことをお前さんは言つたね。」さう言ひ捨てて、立ち去つたのである。私にはわかつてゐる。あの人は、私に、自分の女房を殺して貰ひたいのだ。けれども、それを、すこしも口に出して言ひたくなし、また私の口からも聞いたことがないといふやうにして置きたかつた。それは、あとあと迄、あの人の名誉を守るよすがともならう。女二人に争はれて、自分は全く知らぬ間に、女房は殺され、情婦は生きた。ああ、そのことは、どんなに芸術家の白痴の虚栄を満足させる事件であらう。あの人は、生き残つた私に、さうして罪人の私に、こんどは憐憫をもつて、いたはりの手をさしのべるといふ形にしたいのだ。見え透いてゐる。あんな意気地無しの卑屈な怠けものには、そのやうな醜聞が何よりの御自慢なのだ。さうして顔をしかめ、髪をかきむしつて、友

人の前に告白のボオズ。ああ、おれは苦しい、と。

亭主のしらじらしい言動を受け、女学生は再び「芸術家の白痴の虚栄」「意気地無しの卑屈な怠けもの」などと亭主を痛烈に批判し、さつき「殺してやらう」と決めた女房に対して「いたはり合はなければならぬ間柄ではなからうか」と考える。そして「愚劣な男は死ぬがよい。それにきまつた」と、今度は女房ではなく亭主を殺す決心をするのである。こうした点から女学生の気分の移り変わりが激しいことや、敵意の対象が明確に定まっていないうかがえるだろう。

しかしここで注目したいのは、女学生が亭主の表情や言葉からその本心を見抜いているという点だ。傍線部のような女学生の厳しい批判によつて、亭主のずるさや不誠実さが浮き彫りになっているのである。

以上、亭主に対する女学生の言葉に着目して考察してきたが、女学生は「生れてはじめての恋人」「生涯で唯一の女」といった大袈裟で感傷的な言葉にだまされずに、亭主の身勝手さや不誠実さを痛烈な言葉で批判し、ボオズやずるさを見抜く存在であつたことが分かる。

そしてこの女学生は、「私 (DAZAI)」による「復讐」に一役買つていえると言えるのではないだろうか。「私 (DAZAI)」は亭主、すなわち原作者への「復讐」の方法として、女房を取り立てて擁護するのでなく、亭主の言動を厳しく非難する女学生を書き加え、彼女を通して亭主の卑劣さを描くという

形を取つていふと考える。

一・二・二 亭主の描写から

次に亭主の描かれ方を見ていきたい。亭主の言動は、「第三」から「第六」にかけて描かれている。

「第三」には、女房が女学生に決闘を申し込んだことを知り、興奮してまぐし立てる亭主が描かれている。「あいつはそんな無茶なことをやらかして、おれの声名に傷つけ、心からの復讐をしようとしてゐる」「あれはそんな女だ。いつでも冷たく忍従して、そのくせ、やるとなつたら、世間を顧慮せずやりのける」などといった発言からは、決闘を申し込まれた女学生を氣遣うというよりも自分の声名や世間の目を気にする亭主の様子が読み取れる。

また、「その時の私のうつろな絶望の胸には、とてもリリカルにしてみてもたのだ。銃身の黒い光は、これは、いのちの最後の詩だと思つた」など感傷的な言葉を多用して長々と話したり、女学生へ向けて話しているのでありながら「女房への不憫さの涙であつたかも知れないね」「ああ、おれはそれを頼もしい性格と思つたことさへある！ 芋の煮付けが上手でね」などと女房への同情や懐古の情を口にしたりして、要領を得ない。亭主は、女学生を氣遣つたりこの事態への対処法を考えたりするよりも、女房が女学生の存在に氣付き、彼女

と決闘するために射撃の練習をしていたという事実にただうろたえ興奮しているのである。

こうした亭主は、氣障で頼りにならない男として読者の目に映るだろう。先述した女学生の手厳しい非難も合わせて、「私 (DAZAI)」は「次回より能ふ限り意地わるい描写を、やつてみるつもりなのであります」との宣言通りに、ずるくて薄情な男として亭主を描いていくのである。

次にあげるのは、女房と女学生の決闘の様子を隠れて見ている際の亭主の内面の動きを描いた箇所である。

たのむ、女房を殺せ！ あいつは邪魔だ！ 賢夫人だ。賢夫人のままで死なせてやれ。ああ、もうどうでもいい。私の知つたことか。せいぜい華やかにやるがいい、と今は全く道義を越えて、目前の異様な戦慄の光景をむさぼるやうに見つめておました。誰も見た事の無いものを私はいま見てゐる、このプライド。やがてこれを如実に描写できる、この仕合せ。ああ、この男は、恐怖よりも欲喜を、五体しびれる程の強烈な欲喜を感じてゐる様子であります。

亭主の内面描写において注目したいのは傍線部のように、亭主の独白に対して「私 (DAZAI)」がしばしば自分の解釈を差し挟んでくるという点である。そのため、亭主の独白は完全な独白とは言えない。「私 (DAZAI)」は、亭主の言動や内面の動きを状況中継するような形であれこれ批評や解説を

加え、読者に向けて自分の意見を押し出してくるのである。

これは女学生の描写の際には見られなかった特徴だと言える。そこでここからはこの特徴に着目し、亭主の心中の描写に対する「私 (DAZAI)」の解説や批評も合わせて考えていきたい。

「私 (DAZAI)」は「第四」の冒頭部において、芸術家に「殆ど例外なく」見られる二つの「哀れな悪徳」として「好色の念」と「好奇心」をあげている。更に、心中では葛藤を繰り返しながらもこの「哀れな悪徳」ゆえに隠れて決闘の一部始終を見てしまった亭主を「下等の芸術家」「あさましい芸術家」「ずるい、悪徳の芸術家」「卑怯千万の芸術家」など何度も殊更に非難するのである。この「私 (DAZAI)」の亭主への非難は、一・一・一で触れた女学生からの非難と同じく「復讐」宣言に基づいた「能ふ限り意地わるい描写」の実践であると言えるだろう。いわば亭主は、作中人物の女学生と語り手の「私 (DAZAI)」それぞれによって批判される立場にあるのである。

しかし、「それは何も、この男ひとりに限つて、下等と呼んでゐるのでは無くして、芸術家全般がもとより下等のものであるから」「芸術家といふものは、例外なしに生れつきの好色人であるのでありますから、その渴望も極度のものがあるのではないかと、笑ひごとでは無しに考へられるのであります」などという発言を読むと、亭主と同じく作家でありこ

の場で読者に向かって独自の「女の決闘」を語っている「私 (DAZAI)」のことが当然意識される。自分も同じく芸術家であるにもかかわらず、その点には触れずに「まことに芸術家の、表現に対する貧乏、虚栄、喝采への渴望は、始末に困つて、あはれなものであります」「芸術とは、そんな狂気じみた冷酷を必要とするものであつたでせうか」と、まるで他人事のように亭主を非難する「私 (DAZAI)」の語り口にはやや違和感がある。

しかもこの後、「第五」において「私 (DAZAI)」は亭主への「復讐」の態度を一変させるのである。決闘を見ていた際、女学生と女房、どちらの死を望んだか、という市の裁判所の検事の問いに対し、亭主は、どちらも生きてくれと念じていた、と答える。この亭主の答えについて「私 (DAZAI)」は「その時の、男の答辯は正しいのです。(中略)男は、あの決闘の時、女房を殺せ!と願ひました。と同時に、決闘やめろ!拳銃からりと投げ出して二人で笑へ、と危く叫ばうとしたのであります。人は、念々と動く心の像すべてを真実と見做してはいけません」「多くの浮遊の事実の中から、たつた一つの真実を拾ひ出して、あの芸術家は、権威を以て答へたのです。検事も、それを信じました。二人共に、真実を愛し、真実を熟知し得る程の立派な人物であつたのでせう」などと解説を加える。

女房の味方となつて復讐するため「第二」から「第四」に

かけて原作者である亭主を批判し続けてきた「私 (DAZAI)」は、ここに来て急に亭主を擁護し始める。しかも「弁護のしついでに、この男の、身中の虫、「芸術家」としての非情に就いても、ちよつと考へてみることに致しませう」「芸術家といふものは、その腹中に、どうしても死なぬ虫を一匹持つてゐて、最大の悲劇をも冷酷の眼で平気で観察してゐるものだ、と前回に於いても、前々回に於いても非難して来た筈であります、その非難をも、ちよつとついでに取り消してお目に掛けたくりました」などと、ごく軽い調子で考えを一転させるのである。「第四」では亭主を「サタン」とまで言つておきながら、「真実を愛し、真実を触知し得る程の立派な人物」というほどまで評価を変えるのはかえつて胡散臭くわざとらしい。「さて、芸術家には、人で無い部分が在る、芸術家の本性は、サタンである、といふ私の以前の仮説に対して、私は、もう一つの反立法を持ち合せてゐるのであります」という平然とした口振りを見ると、「復讐として、若輩ちから及ばぬながら、次回より能ふ限り意地わるい描写を、やつてみるつもりなのであります」という「第二」の意気込みそれ自体が実は虚言であり、「私 (DAZAI)」は最初から「芸術家は決してサタンではない」ということを主張するつもりであつたのではないかという疑いすら生じる。「復讐」宣言以下、女学生による徹しい亭主批判や、芸術家の悪徳についての叙述は、その主張をより効果的にするためのお膳立

てだつたのだと考えられなくもない。

とにかく、「私 (DAZAI)」が「第二」であれば意気込んで宣言した「復讐」は成し遂げられず、それどころか逆に亭主を擁護するような形となるのである。作中人物である女学生や亭主はともかく、彼らの動きを掌握し作品の進行を司っている「私 (DAZAI)」のような語り手によるこのような急転換や一貫性の欠如は、読者を混乱させ不信感を抱かせる。以上のように考えると、「私 (DAZAI)」は非常に信用ならない語り手であると言えるだろう。

太宰作『女の決闘』は、そもそも「私 (DAZAI)」という語り手の強引で一方的な鷗外訳の解釈を出発点として構築された小説なのである。いわば太宰作は「私 (DAZAI)」の一人舞台であり、彼はそこで勝手気ままに振る舞つてみせることで読者を混乱させる。ここでは、こうした「私 (DAZAI)」のいい加減さを押さえておきたい。

では、なぜこのようないい加減な語り手が登場するのだろうか。以下、「私 (DAZAI)」とはどのような存在なのかという点を中心に考察する。

二 「私 (DAZAI)」の在り方

二・一 「勉強いたす」ことへの批判

「私 (DAZAI)」の在り方を考えるにあたり、まずこの語

り手が、もったいぶって鷗外を読み「勉強いたして居ります」と自己満足しているような作家や「研究科の生徒たち」の態度を繰り返し批判していることに着目したい。「私(DAZAI)」は「第一」の冒頭で「一回十五枚づつで、六回だけ、私がやってみることにします。こんなのは、どうだらうかと思つてゐる。たとへば、ここに、鷗外の全集があります」と語り出すが、「勿論、よそから借りて来たものである。私には、蔵書なんて、ありやしない」と続け、以下にあげるような批判へと話を脱線させていく。肝心の「こんな」の内容については触れようとしなない。

・私は、世の学問といふものを軽蔑して居ります。たいてい、たかが知れてゐる。ことに可笑しいのは、全く無学文盲の徒に限つて、この世の学問にあこがれ、「あの、鷗外先生のおつしやいますことには、」などと、おちよぼ口して、いつ鷗外から弟子のゆるしを得たのか、先生、先生を連発し、「勉強いたして居ります。」と殊勝らしく、眼を伏せて、おそろしく自己を高尚に装ひ切つたと信じ込んで、澄ましてゐる風景のなかなか多く見受けられることである。

・けれども、いやしくも作家たるものが、鷗外を読んだからと言って、急に、なんだか真面目くさくなつて、「勉強いたして居ります。」などと、澄まし込まなくてもよささうに思はれる。

「私(DAZAI)」はこの後で「二」に鷗外の全集があります。私が、よそから借りて来たものであります。これを、これから一緒に読んでみます」と仕切り直し、本題に入つて語り出そうとするそぶりを見せるも、結局、以下にあげるような批判を繰り返す。

鷗外を難解な、深遠のものとして、衆俗のむやみに触れるべからずと、いかめしい禁札を張り出したのは、れいの「勉強いたして居ります。」女史たち、あるひは、大学の時の何々教授の講義ノオトを、学校を卒業して十年のちまで後生大事に隠し持つて、機会在る毎にそれをひつぱり出し、ええと、美は醜ならず、醜は美ならず、などと他愛ない事を呟き、やたらに外国人の名前ばかり多く出て、はてしなく長々しい論文をしたため、なむ学問なくては、かなふまい、としたり顔して落ちついてゐる謂はば、あの、研究科の生徒たち。そんな人たちは、窮極に於いて、あさましい無学者にきまつてゐるのであるが、世の中は彼等を、「智慧ある人」として、畏敬するのであるから、奇妙である。

「第一」の冒頭では、このように「勉強いたす」ことへの批判が、本題から逸れた愚痴のように何度も繰り返されるのである。

また、連載の最終回である「第六」でも「勉強いたす」という表現が用いられている箇所がある。「第六」では、これ

まで分割して掲載してきた鷗外訳「女の決闘」の本文を最後まで引用している。「私 (DAZAI)」は、鷗外訳のラストである、牧師に宛てて書きかけられた女房の手紙を全文引用した後、それを読んだ亭主の思いを状況中継する形で解説を加え始める。しかしその直後「彼は、もともと女性軽蔑者でありました」「また、この不幸の芸術家は、女の芸術家といふものをさへ、てんで認めてあませんでした」などと、亭主が女房の手紙を読む以前に抱いていた女性に対する軽蔑や苛立ちについて、長々と説明し始めるのである。特に以下にあげる「女の芸術家」への批判はくどいほどだが、この「女の芸術家」の態度に「勉強いたす」という表現が使われている。

男の作家の創造した女性は、所詮、その作家の不思議な女装の姿である。女では無いのだ。どこかに男の「精神」が在る。ところが女は、かへつてその不自然な女装の姿に憧れて、その毛脛の女性の真似をしてゐる。滑稽の極である。もともと女であるのに、その姿態と声を捨て、わざわざ男の粗暴の動作を学び、その太い音声、文章を「勉強」いたし、さてそれから、男の「女音」の真似をして、「わたくしは女でございます。」とわざと哽れた声を作つて言ひ出すのだから、実に、どうにも浅間しく複雑で、何が何だか、わからなくなるのである。

ここでは、自分が女性であるにもかかわらず、男性作家の不自然な女性の描き方をわざわざもったいぶつて学ぼうとする

「女の芸術家」の態度を、「勉強いたし」という言葉で表現している。ここで用いられている「勉強いたす」という言葉は、連載初回の「第一」で何度も繰り返された「勉強いたす」とほぼ同じ意味合いであると考えられる。また、ここで批判されている「女の芸術家」は、「第一」で「私 (DAZAI)」がわざわざ「女史」と限定して批判する「れいの「勉強いたして居ります」。「女史たち」を想起させる。

こうした点を見ると「第六」のこの引用部は、「私 (DAZAI)」が亭主の以前抱いていた考えについて読者に解説するというよりむしろ、「私 (DAZAI)」自身が現在抱えている軽蔑や嫌悪を興奮ぎみに吐き出しているかのようだ。「私 (DAZAI)」は、作中人物である亭主の過去の女性観について解説するという形を取りながら実は、「第一」と同じ批判をここで再び繰り返しているのではないだろうか。そもそも、女房は芸術家でないにもかかわらず、「女の芸術家」に対する批判がここでこれほど長々と語られていること自体、違和感がある。

「第一」の冒頭において、なかなか本題に入ろうとせずに「世の学問といふもの」への軽蔑を長々と語る「私 (DAZAI)」の態度は、いたずらに原稿の枚数を稼ぐための、その場限りのものにも見える。しかし、半年にわたる連載の最終回である「第六」においても「勉強いたす」という言い回しを再び用いて、芸術家に対する批判が語られていることを合わせて考えてみたいのである。ここからは「勉強いたして居ります」

ともつたいをつけ得意になつてゐるような作家や研究者たち、またそうした人間を「智慧ある人」とするような世間の在り方に対する「私 (DAZAI)」の一貫した批判的な姿勢を見る事が出来るのではないだろうか。

また、「私 (DAZAI)」は「だいたい私が、諸君よりもなほ数段劣る無学者である」「私のやうな不勉強家には、何かと便利なやうに思はれます」などと、自分のことを頻繁に「無学者」「不勉強家」と称するが、これは単に自分を卑下してゐるのではなく、世間で「智慧ある人」として、畏敬されてゐる作家や「勉強いたして居ります。」女史たち「研究科の生徒たち」と自分を対比して言つてゐるのだと考えられる。こうした点からも、先に述べたやうな「私 (DAZAI)」の批判意識を見ることが出来るのである。

一・二・二ではいきなり態度を一変させる「私 (DAZAI)」のいい加減さを指摘したが、一・一ではそんな「私 (DAZAI)」の中の一貫した批判意識を確認した。このことを踏まえた上で、次からは「私 (DAZAI)」の在り方について更に詳しく考えていきたい。

二・二 「月刊文章」の性質と読者層

「私 (DAZAI)」は「諸君」「読者諸君」などと読者に親しげに語りかける形で小説を進めていくが、ここからは「女

の決闘」という作品が、どのような読者を想定しているのかという点について考えてみたい。そうすることで、読者に応じた語り手としての「私 (DAZAI)」の在り方をあぶり出すことを目標とする。そのためのアプローチとして、『女の決闘』の初出誌である「月刊文章」に着目したい。

松本和也氏は「月刊文章」について「文章に関する研究・指導・分析・鑑賞等を主軸として、(中略)創作指導や創作余話等も多数掲載し、文芸入門誌としての相貌も併せ持つ」と解説している⁽⁵⁾。

例えば『女の決闘』「第二」が掲載された昭和十五年一月一日発行の「月刊文章」第六巻第一号には、青野季吉の「現代小説の性格」、窪川鶴次郎の「現代小説の文章論」、「名文鑑賞」として川崎長太郎の「宇野浩二氏の文章」、森山啓の「小説技法(第一講)」、月刊文章編集部による「新文章相談」などの記事が並ぶ⁽⁶⁾。

このように「月刊文章」には、文章表現について分析したり小説の書き方を講義したりする記事が多い。創作欄に掲載された作家の作品を読んで楽しむ読者も勿論いただろうが、文章作法や表現法に関心のある読者、あるいは自分で創作を試みる読者向けの雑誌であるという印象が強い。短篇、実話、散文、詩、短歌、俳句など幅広い分野で読者の原稿を募集していることからそれが分かる⁽⁷⁾。また、同じく昭和十五年一月一日発行の「月刊文章」の「編輯後記」には、月刊文

章編集部編『わが小説修業』の売れ行きが好調であり、それに続いて伊藤整の『私の小説研究』が再刊されることが記されている⁽⁹⁾。ここから「月刊文章」の読者の「小説修業」や「小説研究」への興味関心の高さを見ることも出来るだろう⁽¹⁰⁾。「新文章相談」では、作家や雑誌記者を目指す読者がそれぞれの悩みや疑問点について投稿し、編集部がそれに丁寧に答えている⁽¹¹⁾。

こうした雑誌の創作欄に掲載される作品は、他の総合雑誌や娯楽雑誌のそれとは、多少読まれ方が異なるのではないか。つまり、文章作法や小説の書き方を学ぼうとする読者に「研究対象」として読まれる可能性があるとすることである。『女の決闘』において「私 (DAZAI)」が語りかける「諸君」には、「月刊文章」のこのような読者層が反映されていると考えて以下で更に考察を深めたい。

二・三 「月刊文章」の読者との関わり

ここからは、連載発表の場である「月刊文章」と、『女の決闘』の語り手である「私 (DAZAI)」の在り方がどのように関わっているのかを考える。

まず、先ほど考察した「月刊文章」の性質や読者層を踏まえて「私 (DAZAI)」の言説を見直すことから始めたい。次にあげるのは、「第一」で「私 (DAZAI)」が『鷗外全集』「翻

訳篇、第十六卷」から八つの短篇の冒頭部分を引用して読者に語りかける部分である。

どうです。うまいものでせう。あとが読みたくなるでせう。物語を創るなら、せめて、これくらゐの書き出しから説き起してみたいものですな。

傍線部は、「物語を創る」読者を想定した発言と取ることが出来る。

また、次の傍線部に着目したい。次にあげるのは、「第二」で「私 (DAZAI)」が鷗外訳「女の決闘」を引用し、その「冷淡さ」や「そつけなさ」を指摘する部分である。

・ どうです。少しでも小説を読み馴れてゐる人ならば、すでに、ここまで読んだだけでこの小説の描写の、どこかしら異様なものに、気づいたことと思ひます。

・ この「女の決闘」といふ小品の描写に、時々はツと思ふほどの、憎々しいくらゐの容赦なき箇所のあることは、慧眼の読者は、既にお気づきのことと思ひます。

先述した「月刊文章」という雑誌の性質、読者層などを踏まえて考えると、「少しでも小説を読み馴れてゐる人ならば」や「慧眼の読者」といった言葉は、あからさまに読者の自尊心を刺激する意味合いを含んでいるように読める。小説を研究したり分析したりすることに関心がある読者、またそうしたことに自信のある読者は「私 (DAZAI)」のこうした発言に敏感に反応するのではないか。またこうした言葉がきつ

けで「私 (DAZAI)」の指摘に同調する読者もいるのではないだろうか。「私 (DAZAI)」は鷗外訳を特異な作品として仕立て上げ、読者を自分の解釈に導いていくにあたって、こうした発言の持つ効果を十分意識し、巧みに用いていると考えられる。

次にあげるのは「第六」における「私 (DAZAI)」の発言である。

・私にとつては、その間に様々の思ひ出もあり、また自身の体験としての感懐も、あらはにそれと読者に気づかれ無いやうに、こつそり物語の奥底に流し込んで置いた事でもありますから、私一個人にとつては、之は、のちのちも愛著深い作品になるのではないかと思つて居ります。読者には、あまり面白くなかつたかも知れませんが、私としては、少し新しい試みをしてみたやうな氣もしてゐるので、もう、この回、一回で読者とおわかれするのは、お名残り惜しい思ひであります。

・これは非常に、こんぐらかつた小説であります。私が、わざとそのやうに努めたのであります。その為にいるいろ、仕掛もして置いたつもりでありますから、ひまな読者は、ゆつくりお調べを願ひます。

これらは、やはり『女の決闘』を「小説研究」の対象として読んでゐる読者の好奇心をくすぐるやうな、思わせぶりの発言であると言える。『女の決闘』を読んで、自分の創作に生

かすためのヒントを得ようとしている読者や、小説の技法や作法に関心のある読者なら、「私 (DAZAI)」の言う「新しい試み」や「仕掛」などに食い付き、それらを暴こうとするのではないかと考える。

以上、「私 (DAZAI)」の言説を幾つかあげて考察してきたが、これらは『女の決闘』が「研究」の対象として読まれることを十分に意識した上での発言だと言える。

しかし「私 (DAZAI)」の言説は、果たして読者の「研究」に耐えうるものだろうか。先で指摘した「私 (DAZAI)」のいかかわしさやいい加減さをもう一度思い起こしたい。鷗外訳への強引な解釈をもつとらしく語ったり、いきなりごく軽い調子で自分の立場を一転させたりするこの語り手の言説は信用ならず、真面目に受け取るに足るものとは言えなかつたはずである。「第六」では「新しい試み」「仕掛」などと子細ありげに見せているが、そういったものが実際にあるのかどうかは疑わしい。

また「第二」で「慧眼な読者」という発言があつたが、自分のことを「無学者」と称し、世間で「智慧ある人」として、畏敬「されてゐる人たちを批判する」「私 (DAZAI)」の態度を考えると、この「慧眼」という言葉も文字通り受け取れることは出来ないだろう。

このように、読者の自尊心や研究意欲を刺激する発言をしておきながら、肩すかしを食わせるかのような「私 (DAZAI)」

の態度は、何かを学ぼうとしてこの小説に真剣に向き合う者を皮肉り、わざと混乱させるようである。「第六」で「こんなぐらかった小説」の「仕掛」を調べようとする読者を「ひまな読者」と呼ぶ箇所などは、「月刊文章」を愛読しているような読者へのあからさまな皮肉と取ることが出来るだろう。

そして「私 (DAZAI)」のこのような態度は、もったいぶって読書したり「勉強いたして居ります」と得意になったりすることへの批判とも結び付くのではないか。そのように考えると、「第一」の冒頭や「第六」で繰り返される批判は、やはり作品の本題から逸れた単なる愚痴ではなく、実は、相手を明確に定めた痛烈な批判や皮肉だと解釈することが出来るだろう。「私 (DAZAI)」のちゃらんぼらんな語り口や言説、何度も繰り返される、「勉強いたして居ります」式の作家や学者への批判は、「小説作法」や「名文鑑賞」「傑作を書く心構へ」「名文を書く心構へ」などといった記事を次々と掲載する「月刊文章」の性質、またそれらの記事を読んで「勉強」しようとする読者の在り方を踏まえた上での確信的なものであったと考える。

一で考察した「私 (DAZAI)」のいかかわし、また二・一で触れた、「勉強いたして居ります」式の作家や学者に対するくどいほどの批判の裏には、『女の決闘』を読んで「勉強」しようとする読者の鼻をくじいてやろう、あるいはそうしたもったいぶった態度を逆手にとって翻弄してやろうとい

うような狙いがあつたのではないだろうか。

ここで参考として、「月刊文章」に掲載された太宰治の他作品について少し触れておきたい。『女の決闘』連載以前には「答案落第」「春昼」「美少女」の三作が掲載された。また、『女の決闘』連載終了後は、「女の決闘」その他が掲載されている。

「答案落第」は、昭和十三年七月一日発行の「月刊文章」第四巻第七号の「わが小説修業」欄に掲載された。（「月刊文章」はしばしば「わが小説修業」や「わが文学修業」という欄を設けて、作家に語らせている。）

「小説修業に就いて語れ。」といふ出題は、私を困惑させた。（中略）いろいろ複雑にくすぐつたく、私は、恥づかしい思ひである」という冒頭部は、語り始めるにあつての太宰の謙遜の言葉とも取れるが、「小説修業」という大袈裟なテーマで語ることへのとまどいや照れと解釈することが出来る。「月刊文章」の編集部や読者が期待するようなものではないという太宰の意識が、「答案落第」というタイトルにも反映されていると言えるだろう。

「女の決闘」その他は『女の決闘』の最終回が掲載されてから三ヶ月後、昭和十五年九月一日発行の「月刊文章」第六巻第九号の「自作を語る」欄に掲載された。

ここで太宰は「自作を説明するといふ事は、既に作者の敗北であると思つてゐる。不愉快千萬の事である」「あそこの

所には苦心をしました、など一度も言つた事が無い。興覚めなのである。そんな、苦心談でもつて人を壓倒して迄、お義理の喝采を得ようとは思はない。芸術は、そんなに、人に強ひるものではないと思ふ」などと、「自作を語る」ことへの嫌悪を述べることに終始しており、『女の決闘』については「女の決闘」の映画などは、在り得ない」などとわずかに触れているのみである。「月刊文章」がその誌面において頻繁に「自作を語る」という欄を設け、複数の作家たちに各々の著書を語らせる場を作つていたことを考えると、太宰のこれらの発言は、そうした「月刊文章」に対する嫌悪、反発と取ることも出来るだろう。また、こうした発言は、「自作を語る」欄に寄稿した他の作家たちに対する皮肉と取られかねないような内容でもある。

では、他の作家は「わが小説修業」欄や「自作を語る」欄にどのような文章を寄せていたのだろうか。昭和十四年十月に厚生閣から刊行された月刊文章編集部編の『わが小説修業』は、「月刊文章」の「わが小説修業」欄や「自作を語る」欄などに掲載された各作家の原稿を集めて一冊の本にしたものである。内容は「自作を語る」「わが小説修業」「創作態度と技術の研究」の三項目に分けられている。

例えば「わが小説修業」には尾崎士郎や高見順、鶴田知也など二十六人の作家の文章が載せられているが、自分の生い立ちや作家を志したきっかけ、これまでに読んできた本、従

事した雑誌などについて記しているものが多い。ほとんどの作家が「わが小説修業」というテーマに沿った形で書いていると言える。

また「自作を語る」でも、十八人の作家がそれぞれの著書について解説している。例えば太宰と関わりの深かった井伏鱒二は「さざなみ軍記」の生れるまで」というタイトルで、「さざなみ軍記」の制作方法」「作中人物に対する愛着」「史実と材料について」「今後の発展について」「伝説を生かしたい」などの項目を立てて詳しく述べている。

太宰が「わが小説修業」欄に寄せた「答案落第」や、「自作を語る」欄に寄せた「女の決闘」その他」は、このように同じテーマで「月刊文章」に掲載された他の作家たちのものと比べるとかなり異質であるという印象を受けるのである。太宰は「わが小説修業」や「自作を語る」といったテーマで小説家としての自分やその著作について語ること、また、それを小説家を志すような読者が読み、「勉強」の対象とすることに對する照れや反発をかなりはつきりと表明していると言える。

こうした太宰の照れや「月刊文章」の求めるものを書くことへの反発は、創作欄に掲載された『女の決闘』の語り手「私(DAZAI)」の態度と繋がる部分があるのではないだろうか。勿論、作品中の語り手としての「私」と作者を同一視することとは危険だが、『女の決闘』の「私(DAZAI)」の在り方は、

作者太宰治のこうした態度をある程度反映していると考え
る。

おわりに

本稿では、「私 (DAZAI)」のいかかわしさやいい加減さが、「月刊文章」の性質や読者層を想定したものであるという点を指摘した。真面目に受け取ることがめらわれるような「私 (DAZAI)」の言説は、『女の決闘』を「研究」や「勉強」の対象として読もうと意気込む読者を皮肉り、翻弄するための確信的なものであったと考える。

また、「第一」や「第六」で「勉強いたして居ります」とすましている作家や学者の態度を繰り返して批判していた「私 (DAZAI)」だが、この批判は「月刊文章」やその読者への直接的な批判でもあったはずである。「第一」には「ことに可笑しいのは、全く無学文盲の徒に限つて、この世の学問にあこがれ、「あの、鷗外先生のおつしやいますることには、」などと、おちよぼ口して、いつ鷗外から弟子のゆるしを得たのか、先生、先生を連発し、「勉強いたして居ります」と殊勝らしく、眼を伏せて、おそろしく自己を高尚に装ひ切つたと信じ込んで、澄ましてゐる風景のなかなか多く見受けられることである」「鷗外を難解な、深遠のものとして、衆俗のむやみに触れるべからずと、いかめしい禁札を張り出した

のは、れいの「勉強いたして居ります。」女史たち」といった批判があるが、矢田津世子は、昭和十一年十月一日発行の「月刊文章」第二巻第十号に掲載された「新しきもの」の中で「同じ眼あたらしさは、鷗外先生の作品を読むたびに感じさせられる」「鷗外先生の眼の新しさに惹き入れられるからである」などと「鷗外先生」と何度も繰り返しながら鷗外の作品を讃えている。

矢田は他の雑誌や新聞でも、しばしば鷗外を「先生」と呼び、敬愛の念を述べている⁽¹²⁾。先にあげた「私 (DAZAI)」の批判は、矢田のこうした言説を踏まえていると考えることも出来るだろう。このように「私 (DAZAI)」の批判の対象は、かなり具体的に定められていた可能性もある。

勿論『女の決闘』は、「研究」や「勉強」の対象として読まれることばかりを想定しているわけではないだろうし、この作品に登場する女学生や亭主と、太宰の他作品における登場人物との関わりなど、他に注目すべき点も多い。しかし本稿のような視点から『女の決闘』を考察してみると、これはいかかわしさやいい加減さをあえて全面に押し出した作品であると言うことが出来る。また「第一」から「第六」にかけて鷗外訳の全文を引用している点や、「第一」で「鷗外全集」「翻訳編、第十六巻」中の作品の書き出しを八つも書き並べている点も、単に原稿の枚数を稼ぐためのものに過ぎないと見ることも出来るのである。

- (1) 東郷克美「虚構と文体——『女の決闘』について」(『解釈と鑑賞』第三十九卷第十五号、昭和四十九年十二月)、久米博「太宰治の虚構と病理——一人称告白体の発見」(『国文学』第三十二卷第一号、昭和六十二年一月) など。
 - (2) 木村小夜「『女の決闘』論」(『太宰治翻案作品論』、和泉書院、平成十三年二月) など。
 - (3) 斎藤理生「太宰治『女の決闘』の方法」(『阪大近代文学研究』第二号、平成十六年三月)
 - (4) 第三者による語りで始まる「第三」の冒頭部「女学生は——こと言つてみたかつた。『私』はあの人を愛してゐない。あなたはほんとに愛してゐるの。」「それだけ言つてみたかつた」は、同じく「第三」の「あくる日、二人の女は、陰鬱な灰色の空の下に小さく寄り添つて歩いてゐる。黙つて並んで歩いてゐる。女学生はさつきから、一言聞いてみたかつた。あなたはあの人を愛してゐるの? ほんたうに愛してゐるの?」に繋がる。
- その間の女学生の独白や亭主との会話の部分(『ゆうべ学校から疲れて帰り、さあ、けさ冷しておいたミルクでも飲みませう、と汗ばんだ上衣を脱いで卓のうへに置いた、そのとき、あの無智な馬鹿らしい手紙が、その卓のうへに白くひつそり載つてゐるのを見つけたのだ』から「おやすみなさい、コンスタンチエ」まで)は、女房の後について決闘場所へ向かう女学生の回想である。
- (5) 松本和也「月刊文章」(『国文学』第四十七卷第十四号、平成十四年十二月)
 - (6) 「現代小説の性格」では、阿部知二の「風雪」の後書きを持ち出しながら、現代小説の性質について考察している。「現代小説の文章論」では、宇野浩二や火野葦平、中山義秀らの文章を引用し解説を加えながら、「明治時代の美文」と「今日の美文」の違いについて述べている。「名文鑑賞」では、宇野浩二作品に見られる特徴の移り変わりを指摘し、「後期」の作品である「終の栖」の書き出しをあげて、「コクを立派に底にひそめる文章」と讃えている。「小説技法(第一講)」では、「小説勉強の基礎」を知るには「天分のある、また最も純粹な作家たちの短篇を見るのが近道であると思はれる」として、梶井基次郎の「交尾」の冒頭部をあげて説明している。
 - (7) 昭和十五年一月一日発行の「月刊文章」第六卷第一号では、「編輯後記」に並んで「原稿募集」とある。
 - (8) 昭和十五年一月一日発行の「月刊文章」第六卷第一号の「編輯後記」には、「『わが小説修業』は地方の諸君からの直接注文引きもきらず、営業部では毎日その発送に追はれてゐる。これこそ新年の好読物。なほつゞいて伊藤整氏の『私の小説研究』が新装して諸君に見える」とある。また、『女の決闘』「第二」が掲載された昭和十五年二月一日発行の「月刊文章」第六卷第二号の「編輯後記」には、「『わが小説修業』依然として売行旺盛。伊藤氏の『私の小説研究』亦本社品切の盛況である」とある。

る。

(9) 「月刊文章」には、読者が感想や意見を投書する「壁新聞」というコーナーがしばしば設けられている。『女の決闘』の連載が始まった昭和十五年一月一日発行の「月刊文章」第六卷第一号の「壁新聞」には、東京都の男性読者が月刊文章編集部編『わが小説修業』についての感想を寄せている。「今度、文章編集部編の『わが小説修業』が出たので、早速一本を購って読んだ。(中略) 輯めてある作家は、現在盛に活躍してゐる人々であつて、その人々が文壇に出た様子が知られ、作品の意図が知ることが出来て、非常に得るところがあつたと思ふ。作家の写真を入れたり、略歴、住所録を入れたりして、そこが編輯者の苦心の有するところであらうが、我々には非常に有難かつた。今後もしかうした計画をどしどし発表して貰ひたい」というものである。これは「読者の意見だが、『小説修業』への興味関心の高さ、『月刊文章』にどのようなものを期待しているかなどを垣間見ることが出来る。

(10) 例えば昭和十五年一月一日発行の「月刊文章」第六卷第一号の「新文章相談」では、創作上のスランプに陥った若い女性が編集部に相談を持ちかけている。「小学校から昨年女学校を卒業するまで作文はいつも甲」だったが女学校上級の頃から芥川龍之介の作品を読むようになり「ものを裏から観るか皮肉にみなければ満足しなくな」ったこの女性は、「最近ぼつく」広範囲の読書をするやう努めてをりますが、この半年の間創作力

も観察力も鈍つて何も書けません。日記帳にしても千篇一律の如きコチ／＼の僅かの感想しか書けないのです。私は如何にして勉強してよいかすつかり解りません」と訴えている。どこか太宰の「千代女」(昭和十六年六月号の「改造」に掲載)を彷彿とさせるような相談であるが、これに対して「月刊文章」編集部は、「この悩みが生ずることは、それだけですでにマンネリズムからは解放されたことになつた証拠」とし、「あなたなどまだ広範囲の読書をするやうになつたと云つても僅か半年ぐらゐではありませんか」「東西偉人、大芸術家の伝記でもどん／＼読んでごらん下さい」「新しい心で一層の御勉強をお祈りします」などと、叱咤激励している。

(11) 昭和十三年一月一日発行の「月刊文章」第四卷第一号では「傑作と名文の生み方」と称して、村山知義の「傑作を書く心構へ」、鶴田知也の「名文を書く心構へ」をそれぞれ掲載している。

(12) 矢田津世子は、昭和十一年六月五日の「読売新聞」に「傍観者」という文章を寄せている。ここで矢田は「鷗外先生は『百物語』の中で傍観者といふことに就いて書いてゐられる」と述べ、鷗外の「百物語」の一節をあげて「自分もまた生れながらの傍観者」と鷗外への共感をしきりに語っている。また「鷗外先生の作品に特種の親愛を感じ、胸いつぱいの懐しさで一字一字を拾ひ読むのは、異郷で恩師にでもめぐり会つたやうな気がするからである」としている。

ちなみに『女の決闘』「第一」では、「勉強いたして居ります。」女史たちや「研究科の生徒たち」を「あさましい無学者にきまつてゐる」とし、「鷗外だつて、嘲つてゐる。鷗外が芝居を見に行つたら、ちやうど舞台では、色のあくまでも白い侍が、部屋中央に端座し、「どれ、書見など、いたさうか。」と言つたので、鷗外も、これには驚き閉口したと笑つて書いて在つた」と述べているが、こゝで「私 (DAZAI)」があげているのも、おそらく鷗外の「百物語」の中の一節である。以下に「百物語」の引用を示す。

俳優は依田さんの意を迎へて、「なんでもこれからの俳優は書見をいたさなくてはなりません」などと云つてゐる。そしてさう云つてゐる態度と、読書と云ふものが、此上もない不調和に思はれるので、僕はおせつかいながら、傍で聞いてゐて微笑せざることを得なかつた。同時に僕には書見と云ふ詞が、極めて滑稽な記憶を呼び醒した。それは昔どこやらで舊俳優のした世話を見た中に、色若衆のやうな役をしてゐる役者が、「どれ、書見をいたさうか」と云つて、見台を引き寄せた事であつた。なんでもそこへなまめいた娘が薄茶か何か持つて出るようになってゐた。その若衆のしらじらしい、どうしても本の読めさうにない態度が、書見と云ふ和製の漢語にひどく好く適合してゐたが、此滑稽を舞台の外で、今繰

り返して見せられたやうに、僕は思つたのである。

作者太宰治が矢田の「傍観者」を読んでいるとするならば、それが「私 (DAZAI)」の発言に反映されていると考えることは可能だ。矢田の文章を意識して、あえて「第一」で「百物語」のエピソードを用いていると取ることも出来るだろう。「百物語」を読み「鷗外先生の作品」への「特種の親愛」を繰り返して述べる矢田を、同じ「百物語」の一節を用いて攻撃していると解釈出来るのである。

また、矢田は昭和十一年三月「文藝通信」に発表した「日記より」でも、「森鷗外先生の『キタ・セクスアリス』の中に大へん心を惹かれた一文がある」と述べて「キタ・セクスアリス」の一節を引用し、鷗外への共感や尊敬を語っている。

以上、「傍観者」「日記より」の引用は『矢田津世子全集』（小澤書店、平成元年五月）に拠る。「百物語」の引用は『鷗外全集第九卷』（岩波書店、昭和四十七年七月）に拠る。

【付記】太宰作品の引用は『太宰治全集』全十三卷（筑摩書房、平成十年五月〜平成十一年五月）に依る。引用に際し、原則としてルビは省き、旧漢字は現行のものに改めた。また、傍線や波線は論者が付した。

（いわきさわ／本学大学院博士前期課程）